32

第三高等学校医学部教授・坂田快太郎の留学通信

小田晧二

明治の日本医学は徹底したドイツ一辺倒の時代であり、ほとんどの留学生がドイツに留学した。とくに明治三二年前後には京都大学の新設と、数少ない医育機関であった五つの国立の高等学校医学部が専門学校に昇格することになったため、例年よりも多くの留学生が派遣された。文部省留学生が最も多かったが、それ以外の公費によって派遣された者もあり、その他の自費留学生やドクトルの学位を目的とした留学生も少なくなかった。

岡山の第三高等学校医学部外科教授・坂田快太郎（嘉永元年岡山県小田郡美星町に生まれ、明治二〇年東大卒）は、附属病院であった岡山県病院の外科医長を兼任していたために、初めて岡山県から二年間の予定でドイツに派遣された。二年二ヵ月の間に坂田が家族に書き送った手紙は七〇通前後と推定され、三二通が現存している。そのうち二三通がひらかな文、九通がカタカナ文で、読みやすい長文の便りで、候文が多い。

坂田は明治三三年（一九〇〇）八月一日神戸港を出航、マルセーユを経由し九月一九日にスイスの首都ベルン着、帰国したのは三五年一二月であった。はじめはベルン大学のコッヘル教授に師事する予定であったが、教授が長期不在であり、ベルンのドイツ語がよく通じなかったことから、九月三〇日にベルリンに移った。

坂田はドツイの気候風土やドイツ人気質などを細かく書いているが、始終一貫しているのは、思郷病（ホームシック）に悩まされていたことである。夢にまで見ていた洋行も、実際に来てみると遠島流刑のようにつらいと訴えている。岡山県より支給された留学費用は月百五〇円で、また物価が高く予想以上に出費がかさみ、生活が困難であること等を書き送っている。

当時の医学留学生の中では、東大出身者が最も多く、次に岡山出身者が多かった。ほとんどの留学生は妻帯者であ

り、自戒のためにブレスラウの留学生は、筒井八百珠を会長とする「かかあ大切会」という会をつくっており、坂田はその会の名誉幹事に推薦された。

一一月中旬にベルリンからオーデル川に沿うブレスラウ（現ポーランド領）の大学に移り、世界的に有名であった外科教授ミクリッツに師事した。教授の自宅を訪問したこと、大学の回診風景、夜会や舞踏会の様子など、さらにミクリッツの指導によって動物実験による研究を始めたことを報告している。

ブレスラウに移ってからも医学講習会やその他の用件のため、汽車で五時間かかるベルリンまで再三往復している。ベルリンでは日曜日に日本からの留学生とともに郊外のリゾート地を訪れたり、天長節に日本公使館より晩餐会に招待され日本食の御馳走になったり、時には、日本語の教師として滞独中の巌谷小波を指導者として開かれた「白人会」という句会にも出席した。また、乏しい金の中から留学生仲間とともに東欧諸国や、スイスアルプスにも旅行している。

当時は、ドイツでもまだ電話が普及していなかったので、留学生同士は主として絵葉書によって、到着、入学、転学、転居、帰朝の挨拶や、寄せ書き、俳句や歌など、ひんぱんに気軽に情報交換を行っていた。絵葉書は異国で生活する留学生にとって欠かすことのできない大切な通信手段であったし、坂田は美しい絵葉書そのものに関心を持っていた。ベルリンでの留学生の世話役的存在であり、東大内科助教授で後に駒込病院長をつとめた宮本叔は、当時の絵葉書を約六百枚持ち帰っており、女婿の遠山嘉雄氏により整理されている。その中には坂田が出したものもあり、それと家族に送った手紙とを照合すると、より詳しく留学生活の一端をうかがい知ることができる。

岡山で開かれた本会の第九一回総会で田中助一氏により山上兼輔、長門谷洋治氏により筒井八百珠が発表されたが、山上とはベルリンで同宿であったし、ブレスラウにいた筒井とはとくに親しく付きあっていた。

明治の医学留学生が、ドイツから家族に宛た哀歓に満ちた手紙を紹介する。

（岡山県井原市）